

外国人として日本で働くこと・暮らすこと

中川 千草

■ 参加者

バフォデ・バンゲーラ (Bafode Bangoura):ギニア共和国コナクリ市出身のミュージシャン (伝統打楽器奏者) として、2010年に日本に初来日。日本各地をめぐるツアーを開始した。翌年2011年、日本人女性との結婚を機に、東京に拠点を移す。現在は都内に在住し、妻や仲間と共にミュージシャンとしての活動を行いながら、日雇いやパートタイムの仕事に従事している。

フォデ・ラミン・スマ (Fode Lamine Soumah):ギニア共和国コナクリ市の出身。ギニアでは、伝統楽器 (太鼓) の制作や修繕にかかわる仕事に従事していた。2012年春に生活の拠点を日本に移す。同年秋から、建築資材会社での勤務 (パートタイムではあるが、月～土に出勤) を開始し、現在に至る。その傍ら、太鼓のメンテナンスに加え、ギニアの家庭料理などを中心に文化を伝える「Moriya Toundee (モリヤ・トゥンデー=モリヤ村の台所)」を主宰し、活動している。

佐々木 夕子:神奈川県横浜市出身。2003年に JICA 青年海外協力隊・村落開発普及員としてニジェールの農村地域で活動し、2005年からはグループ派遣隊員のリーダーとして村落地域で活動する隊員の活動支援や取りまとめなどを行う。その後京都大学大学院に進学しサヘル地域の人々の暮らしや生業、農村における情報伝達構造など、フィールド調査を通して明らかにした。「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクトの研究者として西アフリカ (ニジェール、ブルキナ、トーゴ)、南部アフリカ (ナミビア) で調査、研究を継続している。現所属は国際協力機構ニジェール支所企画調査員 (2015年～)。

中川 千草:三重県出身。「地域環境知形成による新たなコモングの創生と持続可能な管理」プロジェクトの研究者 (座談会時)。主なフィールドである三重県熊野灘沿岸部 (2003年～)、ギニア沿岸部 (2008年～)、マラウイ湖南西部 (2014年～) において、海辺に暮らす人びとの環境観や地域づくりについてのフィールドワークを実施してきた。地域資源の利用と管理、それを支えるコミュニティのあり方、ネットワーク形成に注目し、フィールドワークで得られたデータをもとに、環境社会学および民俗学的視点から考察している。最近、西アフリカにおけるエボラ出血熱の流行を受け、社会的危機とコミュニティ・レジリエンスに関する研究活動をはじめた。現所属は龍谷大学農学部食料農業システム学科講師 (2015年～)。

■ はじめに

現在、日本社会が抱える問題は多岐にわたる。たとえば、少子高齢化や過疎化、都市の空洞化などにみられる生活者の居住地の偏向、派遣型労働や非正規雇用者の増加による就業形態の変化などは、早急に取り組むべき課題であるにもかかわらず、出口が見えないまま常態化している。同時に、海外からの移住者や労働者がその隙間を埋めるかのように配置され、そこから派生する諸問題を日本社会側の問題ではなく、「かれらの問題」として片づけてしまうという身勝手な言動が見られることも少なくない。

そこで、現在日本の社会に暮らし、小規模工場でのパートタイム労働者あるいは日雇い労働者として働く外国出身者から、日本の労働および住環境について、自国のそれらと比較しながら語ってもらう場を設定する。そのうえで、日本の生活環境のあり方を考えるきっかけとしたい。*これは2014年11月6日に開催された TD 座談会 (佐々木 夕子)「アフリカ人目線で日本社会を捉える」と連続したものとして位置づけられる。

■ 対話の記録

【実施場所：代沢東地区会館（東京都世田谷区）、日時：2014年12月21日、会話はフランス語がメインで、適宜スス語と日本語を使用】

※バ：バフォデ・バンゲーラ氏、フ：フォデ・ラミン・スマ氏、中：中川、佐：佐々木

一同：よろしくお願ひします

中：今日は、二人から仕事と生活について話してもらいたいです。日本とギニアには違いがありますよね。たとえば、バフォデさんの場合はギニアではミュージシャンでしたよね、フォデさんは楽器制作の仕事をしていましたよね、そのことを教えてください。そのあとで、日本に来てから驚いたこともあったかと思ひます。いつもいいことばかりではない、難しいこと、大変なことがあったはずですので、それについて話してください。いいところも、悪いところもふまえて、どんな違いを感じたのか教えてください。では最初に、向こうでの仕事について、バフォデさんからお願いします。

バ：ギニアでは太鼓の仕事しかなかったです。

佐：先生で？

バ：はい、先生です。太鼓の仕事はね、たとえば、結婚パーティとかお祭りとかそういう場で演奏する仕事があります。

佐：いつもあるわけじゃないんですね？

バ：そうです。金曜日、土曜日、日曜日だけ。

佐：週末。

バ：そう、週末に行事があります。だから、たとえば、土曜日と日曜日にサバール¹や結婚式があったとします。でも次の週には何も無いということもあります。

佐：毎週末ではない

バ：そう。毎週末ではない、週ごとに仕事があったり、なかったり。仕事を得られるときあれば、そうではないときもある。土曜日だけの週もあれば・・・。

佐：では、月曜から金曜までは何をしていますか？

バ：わたしには音楽しかありません。だから、練習をして、若者の指導をしています。週末に行事で演奏する仕事があれば行きますし、なければ、休みです。

佐：わかりました。

バ：これがわたしのギニアでの仕事です。

佐：何年、この仕事をしていますか？何歳からですか？

バ：わたしが7歳のときからです。7歳から太鼓をたたきはじめました。

佐：7歳？へえ。

バ：7歳からはじめました。でも、はじめから仕事をしていたわけではありません。まずは演奏の仕方を習わなければいけません。たとえば、行事に出かけた際、そこには先輩たちがいます。だから、行事があったとしてもそこへ行くことはできないときもあるし、行ってもたくさん稼げないときもあります。練習するのみです。

佐：何か、競い合う場がありますか？

バ：そういう競争のようなものはありません。あることはありますが、たくさんあるわけではありません。先輩がいますから、まずは習うことからはじめます。ベネディクションを得るためにします。もし行事がたくさんあれば行けますが、なければ、先輩たちだけが行きます。子どものころは、18歳ぐらいに

1 結婚式の前夜22時～2時ごろに行われる、結婚を祝う行事。

なると、演奏の技術はすでに身に着けているので、仕事をするができるようになります。行事があれば、仕事をしに行きます。

18歳ごろからは自分で稼げるようになります。そして、今度は自分がほかのメンバーを集める立場になります。

中：リーダーとしてね

バ：そう、リーダー。

佐：あなたが17歳、18歳ごろから、リーダーになったということですか。

バ：はい、18歳とか20歳とか。そして、ほかの人を呼んで、行事へ仕事をしに行く様になりました。

中：つまり、バフォデさんがグループを組む立場になるということですね。

バ：はい、そうです。わたしがグループを作ります。というのも、たとえば行事があった場合、誰かを呼びます。でももし、いい人でなかったり、尊敬されていないと、誰も集まりません。

中：ひとりで演奏するわけではない。グループで、何人かでパートがあるので、どのパートに誰を呼ぶのかということを決めなければならない。バフォデさんが若い時はグループのメンバーとして呼ばれ、いまは、呼ぶ立場にあるということ。上に立つ人が、「じゃあ、今日はあなた」と言う風に。

バ：そうそうそう。だから20歳ぐらいになると、人を集めて、段取りを組む側になる。自分をよく知っている人をね。そして一緒に仕事をしに出かける。練習のときも同じ。仲間とはいつも一緒です。

佐：それは首都のコナクリだけですか？村に行ったりもしますか？

バ：はいはい、行事があれば、村へ行って演奏することもあります。友だち同士、グループで出かけて行きます。練習でもそうですが、仲間とはいつも一緒なんです。

中：近くの村ですよ？

バ：はい、近くの村です。でも、たとえば、もっと遠いところもあります。その時々によって違います。その行事の遠くからミュージシャンを呼ぶことが重要だと考えるならば、そのミュージシャンの演奏を気に入ってるならば、そのように準備され、呼ばれるので、出かけます。

中：ときどき、(ギニア北西部の) Boke や Kamsir などにも行きますよね。

バ：行きます、行きます。(コナクリ近郊の) Debureka や Coyah や Kindia にも行きます。

フ：どこにでも行きます。バフォデさんが話したように、コナクリにはたくさんの演奏者がいます。これらの演奏者がいくつかのグループを作っています。もし、サバルや結婚式でそのグループの演奏がすばらしければ、そこにいる人、主に女性たちが、「ああ、このグループはいい演奏をするなあ」と思うわけです。コナクリ以外の地域の人が、こういう人たちを呼びたいと思えば、まずは値段を交渉します。30万ギニアフラン²でどうかあ、50万ギニアフランでどうか、と。それで話がつけば、そこへ出かける車などが手配されます。週末に、土曜日にサバル、日曜に結婚式。

中：サバルは前夜祭のようなもので、結婚式の前の夜にします。Boke とか Kamsir というのはわたしの調査地で、(コナクリから) 結構遠い。車で6時間とか。とてもいい道で6時間。でもそこまで行くこともあります。

フ：ギニアではバフォデさんは太鼓を叩く、わたしは太鼓を作る。グループはいろいろあります。たとえば、このグループが行事で演奏したとき、演奏後に稼ぎを分け合います。ギニアでの仕事と日本の仕事は同じではありません。ギニアではいつも仕事があるわけではありません。わたしたちのように音楽関係の仕事は、週末だけ稼ぐことができます。他の日に稼ぐことはできません。普段は練習して、グループを組んで、仕事があれば行きます。わたしたち職人は、太鼓などの楽器を作ります。そして、日本やヨーロッパや、フランス、パリに友だちがいますので・・・。

2 日本円で約 4000 ~ 5000 円。

佐：そこへ送るんですか？

フ：はい。送ります。そこに友人、知人が住んでいます。たとえば、わたしの先輩であるカラモコ・カマラ氏は以前日本に住んでいました。わたしは彼との取引があります。また、アメリカにはアマラ・カマラ氏という仕事上のパートナーがいます。スペインには、アブバカール・シッラ氏という人がいて、彼と仕事をします。わたしが働いている楽器工房、名前は「ウーララ」と言います。スス語で「わたしを信じて」という意味です。

佐：いい名前ですね。

フ：これがわたしの工房の名前です。バフォデ氏とも仕事をします。たとえば、彼の太鼓が壊れてしまったときは、自分に任せます。ときどき。それから、(ギニアで音楽を学ぶための)ツアーがあります。ツアーには日本人も来ます。

佐：日本人も？

フ：はい、ジェンベ(太鼓)を学ぶために、ダンスを学ぶために。実際、わたしと妻の出会いもそうです。彼女は音楽とダンスを学ぶためにギニアへ行きました。そこでわたしたちは出会いました。いまは日本に来ましたが、わたしはギニアに住んでいましたので、向こうで結婚式をしました。それから日本に来ました。日本とギニア、大きな違いがあります。アフリカは素晴らしい、わたしたちの文化も素晴らしい。でも、難しさもある。仕事の仕方は全然違います。わたしたちの国ギニアでは、いつも仕事があるわけではありません。日本のように毎日ではありません。とても厳しいです。日本には毎日、電気も水もあります。アフリカは違います、(生活が)大変です。電気も水もありません。大統領が問題の根源です。辟易です。みんな、家の中を清潔にしたいけれど、実際には不衛生です。来たら、分かりますよ。日本に来ると、みんな元気だし、仕事はあるし。仕事があれば稼ぐことができますが、仕事がなければお金は入ってきません。水もあります。でも毎月、月末になると支払いがありますよね。

佐：ギニアでも支払いはありますよね？

フ：はいはい、あります。でも、支払う人もいれば、支払わない人もいます。大統領のせいですよ。いつもあるなら(支払う)。でも違います。大統領が止めてしまうんです。前払いしても、水は止まってしまう。日本では、もしバナナを食べても道に捨てたりしませんよね。でも、(ギニアでは)食べたなら道に捨ててしまいます。こういうことをしていると、病気の蔓延につながります。日本に来て2年6ヶ月が過ぎました。その間、2年1ヵ月働いています。

佐：すごいですね。いつも働いてるんですね。

フ：はい、いつも仕事があります。日曜だけ休みです。日本とギニアは違います。働かなければならない。家族が(ギニア)で待っています。ママがいます。

佐：ということは、ときどき送金しているということですか？

フ：はい、ときどき。収入があれば、ママに食費を送ります。ベネディクション(施し)を与えなければなりません。もし稼いだら、ママに。それがとても大事です。仕事をしなければ、何もできない。

佐：もし働かなければ、送れないですね。

フ：だから、日本ではがんばらないといけないんです。わたしたちの(ミュージシャン・楽器職人としての)文化・ロジックはいつも日本で機能するとは限りません。他の仕事をしなければなりません。家賃、水、電気の支払いがある。違いがある。

佐：全部払わなければなりませんね。

フ：はい、全部払わなければなりません。

中：毎月ね。

フ：毎月、月末に支払いがあります。これは大事。しっかり働いたら、うまくいく。うれしい。日本では、神様が見守ってくれている。仕事をすれば、幸せになる。

佐：みんな仕事をしてるの？ボランティアというのは仕事ではないのですか？

フ：もしボランティアをしたら、仕事につながるかも。わたしの妻もいまは信用してくれている。

バ：2011年から、わたしは日本に来ました。

佐：2011年？

フ：2011年に、はじめて日本に。

佐：ということは3年？

バ：4年です。はじめて来たときは、(音楽の) ツアーをしました。いつも太鼓を叩いていました。ギニアでは毎日練習して、土日に行事があれば、演奏をして稼いでいました。日本では違います。わたしは日本に来て、毎日ツアーをして、いつもとても忙しかった。

中：はじめて日本に来たときは、ツアーで来たんです。毎日仕事があった。ワークショップとか、ライブとか。1ヵ月とか？

バ：はじめて・・・3ヶ月。

佐：3ヶ月ずーっと？

フ：うん、ずーっと日本で。

中：ほぼ毎日、あちこち移動して、東京だけじゃなくて、九州とか。

フ：福岡とか。

中：だから、日本の生活とはこういうものなんだと思った・・・。

バ：そうです、そう思っていました。日本の生活とはこうなんだ、と。ギニアと全然違う。そのときは、そう理解した。

佐：こういうのはいいと思った？

バ：はい、いいと思った。でも、こうではないと思ってた。ギニアでは4日間練習して、もし行事があればそこで稼ぐ。日本に来て、1週間の内4回、5回と仕事がある。すごく忙しいなと思った。全然違うと思った。

中：2度ツアーをしたんですって？

バ：はい、2回。

中：2年連続で来日してツアーをしているので、そういう生活だと。だから、これは一つ目の驚きですよ。でも、生活を始めたら、二つ目の驚きがあったでしょ？

バ：はいはい。

佐：ああ、わかりました。

バ：ギニアでも(スタディ)をしたし、それから日本に来てツアーをして、そして、ここで生活を始めた。

佐：それはいつ？

バ：2012年です。

佐：あなたは、それから生活を始めたんですね。

バ：はいそうです、家族と一緒に。いま、ここで生活を始めて・・・。

佐：東京で？

バ：はい、東京で。ここで生活を始めてからは、音楽の仕事もしています。でもほかの仕事をしなくてはならないと思っています。もし家族があるなら、毎日仕事がなく、土日だけワークショップやライブをするというのは、厳しい。たぶん、ギニアではこれで大丈夫。でも、システムが違う。なぜ違うのか。ギニアではそもそも仕事がない。でも日本では、もし働きたければ、他の仕事をする事ができる。土日だけ、音楽の仕事をするればいい。平日家に居つづけるのは、ちょっと辛いものがある。最初の1ヵ月、いつも家に居て、土日だけ働いて・・・ほかの仕事もしなくてはならないな、と。でも、音楽以外の仕事に就いたことがなかった。知らない。

佐：4年間、音楽だけ？

バ：音楽だけ。でも、仕事をしなければならない、と思った。はじめてした仕事は・・・。

中：それは何の仕事？

バ：えーっと、(建築)現場の仕事です。わたしは仕事がなかった。がんばらなければならなかった。もし仕事の仕方がわからないと、大変。でも、やる気がないと、できない。3ヶ月、働いた。でも季節が寒くなった。

佐：住み始めたときは、いつ？何月？

バ：わたしが来たのは、5月・・・かな？

中：最初は仕事がなくって。どうやってその現場を見つけたの？

バ：ダラマンさんという人がいます。あなたは知ってるでしょ。マリ人です。

佐：東京に住んでる人？

バ：そう、東京に住んでる。ある日、彼と一緒に音楽の仕事をしたんです。そこで、彼に仕事を紹介してほしいと頼みました。あなたと一緒に働けないかと聞きました。すると、OKだと。会社の電話番号をくれたので、それをわたしの妻に渡して、彼女がそこにかけました。そして、一緒に出掛けました。(ギニアと)どんな違いがあるかと言うと、そのときは言葉の問題があった。あまり日本語を話せなかった。

中：今みたいにしゃべれなかった。

バ：そう。だから、日本では日本語がわからないと、仕事ができない。むずかしい。すごくむずかしい。面接をしなければならなかった。それはとてもびっくりした。アフリカと全然違う。

佐：なんで？どう違うの？

バ：アフリカは、もし仕事をしたいと思ったとき、面接はない。書類を送って、待って・・・。

佐：それだけ？

バ：はい、それだけ。もし働きたいなら、それを伝えて、そこへ行く。

佐：ああ、面接はないんですね。書類だけ。

バ&フ：そう、書類だけ。

バ：書類を見る。

フ：書類を見て、よければ雇うし、よくなければ放っておく。もしよければ、明日から働いてください、ということになる。

バ：日本では面接で、たくさんのかたを質問される。これは大事だと思う。

佐：面接会場にはあなただけが行ったの？それとも、奥さんと一緒に？

バ：はい、奥さんと一緒に。そのときは、日本語をうまく話せなかったから。聞くことはできる。でも話したり、答えたりは、むずかしかった。そして、仕事をもらえて、日本での仕事を始めた。がんばった。コミュニケーションはあまりとれなかったけど、少しずつ、日本語を理解するようになった。これを取ってほしいとか、そういのはジェスチャーを使った。話していることはわかるんだけど、話すというのはやはり難しい。だから、少しずつコミュニケーションをとるようにした。3ヶ月働いた。でも寒くなってきて・・・太鼓を叩くでしょ、手で。でも寒いと叩けなくなる。だから辞めた。辞めてしまったから、またそこで働くことは難しい。(こういうことを通して)働くということは、日本とギニアではずいぶん違うなと思った。

佐：現場で、上司がいるでしょ。親方？

バ：親方。

佐：その親方は、外国人と働くことに慣れていましたか？

バ：ああ、はい、彼は慣れていたと思います。わたしの友達がすでに働いていましたし。

中：ほかにアフリカの人はいましたか？

バ：いえ、いませんでした。ダラマンさんと日本人だけです。そこで働いていたのは。そのとき、日本人だけだったら、わたしはきつかったと思います。日本語の問題があるから。でももし、アフリカの人が出て、話すことができたら、がんばることができます。彼がいたから、わたしは3ヶ月間がんばることができました。

中：毎日？

バ：はい、毎日。

佐：週末は？

バ：現場に週末の休みはありません。でも、わたしは音楽の仕事があったので、土日は休ませてもらえるように頼んでいました。あらかじめ、いつ働いて、いつ休むのかを伝えておきます。それをせずに、休んだりするのはよくない。だから紙（シフト表）を出します。

佐：ダラマンさん？アブドゥラマン？

バ：(笑い) ダラマンもアブドゥラマンも同じです。

佐：ダラマンさんは、彼は日本語を話すんですか？

バ：はい、彼は日本に慣れていました。10年以上住んでいますから。自分が日本での生活を始めたときには、すでに彼はそこで働いていましたからね。現場で。だから、彼がそこでコミュニケーションをとってくれているから、だから、わたしもそこでがんばれたんです。もし彼がいなければ、コミュニケーションをとることは難しかった。とても辛い。

フ：わたしもそうです。はじめ、セネガル人と知り合ったことで、いまの仕事を教えてもらいました。職場でアフリカ人で仕事ができる人がいないかと聞かれていたようで、わたしに紹介してくれました。家にいたら、彼が電話をかけてきて、奥さんに書類を用意してもらおうように言いました。それを持って、会社へ出かけ、みんなが同意して仕事を始めました。彼は他の仕事を見つけ、やめてしまいました。だから、その職場でアフリカ人は自分だけです。いまは。わたしだけです。でも大丈夫です。会社の人みんなとてもいい人たちです。

佐：日本人の同僚はいい人たちですか？

フ：はい。とてもいい人たちです。とてもやさしいです。ほんまにやさしい。ほんまにうれしい。すごい、社長さんとか、すごくやさしい。自分が仕事をがんばっていると喜んでくれる。アステック。

中：彼の会社の名前が、アステックなんです。

佐：どんな仕事？

フ：(動画を見せながら) 空気を入れて・・・。

中：これは建築現場で使う資材で、緩衝材みたいなもの。

フ：空気を入れて。

佐：ずっとそこで？

フ：そうそう。

中：同じ会社で。

佐：2年？

フ：これを準備する。

佐：消防ホースみたいだね(笑)。

フ：6mとか、4mとか8mもある。いつもこれを作ってる。

中：でね、これ、パンクがあるかどうかを。パンクしてると使えないから、それをチェックする仕事もある。

佐：水とかに入れて？

フ：そうそう、すごく冷たい。いま、日本は寒いでしょ？すごく冷たいいつも、手とか。

佐：大丈夫？あかぎれとか。

フ：がんばってる。ほんまにがんばってる。こっちもスポンジもあるし。

中：建築現場で使う材料。

フ：スポンジをいつも現場に。これは2mの分。1mとか3.5mもある。わかる？わたし、ほんとにがんばってる。日本人は1ヵ月、2ヶ月、3ヶ月とかですぐやめる。

中：日本人はね。きついから。

フ：1ヵ月、2ヶ月でやめる。疲れてしまう。

佐：ああ、疲れてしまう。

フ：でもがんばってる。いま、わたしは先生のような感じ。

佐：ああ、先輩ですね。

フ：そう、先輩。日本人に教えます。どのように仕事をしたらいいのか・・・わたしがそれぞれに指示します。あなたはここで、とか。朝に職場へ行って、今日はあなたはこれをしてください、という風に。あなたはこれ、あなたはこれ、とか。

バ：フォデはいま、親方になった。

(一同、笑う)

バ：2年仕事がんばってるのは、すごい。

佐：続けるというのはすごい。

フ：社長とか、喜んでくれる。アフリカ人ががんばってるのを見て。

バ：よかったね。

佐：朝から何時まで？

フ：9時から18時まで。ときどき19時とか。残業がある。仕事がいっぱいあるから。20時ということもある。

バ：え？残業もあるの？

フ：はい。します。

バ：すごいね。

フ：なぜするのかというと、(日本で)働くということには、わたしたちの国との違いがあります。もし働けばいいことがあるけど、働かなければいいことなんてない。もしお金があればできることも、お金があればできない。したいことができない。日本とギニアは同じではない。日本に住んでいるなら、がんばって働かなければならない。アフリカに家族がいる。アフリカには何もない。だから、しっかり働いて、しっかり稼ぐということを強調しなければならぬ。それが大事だ。日本にいるということは幸せなことだ。とても幸せだ。働いて、稼げる。家族はリラックスできる。会社にも仲間がいる。

バ：日本で働くことは難しい。なぜか。まったく知らない仕事をしなければならぬから。たとえば、あなたたち(日本人)はギニアでの仕事というものはわからないはずだ。ギニアから来た人もここでの仕事は分からない。誰も知り合いがない。はじめは、これがとても大変。

佐：最初がね。

バ：そう、最初が。友だちが・・・。

フ：もし助けてくれる友達がいなければ、働くことはできない。いじわるな人もいる。それが辛い。とても親切な人もいる。でも、中には、朝出勤すると、あれをしろ、と指示してくる。そういう人もいるからつらいときもある。監督はやさしい。他の人に指示をして、今日はフォデと一緒に仕事をすると言ってくれる。

佐：やさしい。

フ：こういう人たちがいることで、がんばれる。

バ：たとえば、人がたくさんいると、4人はいじわる、4人はとてもやさしい、2人は悪い人、そんな風に。がんばるためには、はじめに、どんな人がいるのか見る。やる気を持てるのか、そうではないのか。辛

いだけなのか。見てみる。1ヵ月、1年と働くと、コミュニケーションが出てくる。だから、リラックスできる。問題もない。でも、はじめはむずかしい。

フ：ときどき、嫌な人もいる。たとえば、2m、3mとか分からない。朝出勤して、パンクがあるかどうかを見る。パンクがあればこっちに、なければこっちに、とか。終わったらどうするのか。(長さの説明をジェスチャーで示しながら) もっと長いものもある。でもわたしはわからない。どれがどの長さが最初はわからない。だから、とても大変だった。ゆっくり、ゆっくりじゃないと分からない。いまは大丈夫。みんなに教える立場になった。みんなで、3m、5m(の材料は) どこ?と聞いてくる。たとえば、100本、200本とか、あとで車で取りに行くよと電話がかかってくる。

バ：あとね、日本での仕事のときには、たとえば、きれいに仕事をしないと社長に怒られる。はじめでは知らない、わからない。だから、グシャグシャになってしまう。グシャグシャになってしまうと、困る。でも、はじめは分からない。頭が・・・(笑)。

フ：(写真を見せながら) ここに水がある。東京とか、パンクがあると、大阪に持ってきて。

佐：それを全部修理してるの？

フ：そう。これで水を。

佐：ここに水があるの?ここでやるんだね。

フ：すっごく冷たいよ。

バ：お湯は入れないの？

フ：お湯はダメ。

バ：大変だね。

佐：この会社はどこにあるの？

フ：大阪。岸里。JRの。

中：東京にもありますね。

佐：(写真を見ながら) あ、これはオフィス？

フ：はい。

中：いい人と悪い人がいて、引っ越しの仕事とかね。

バ：いろんな仕事をやったことがあります。辞めるから(笑)。

佐：つづかないんですか？

中：一番の違いは、音楽の仕事とのバランスをどうするかという問題があるんですよ。音楽の仕事だけでは食べていけない。音楽の仕事も大事で、どうやってバランスを取るのかが、難しい。たとえば、今の仕事も大変。ミュージシャン、太鼓奏者は手が大事なので、手を冷たくするとか、冬の現場とかダメ。実際、病気がある。手が冷たくなってしまって白くなるという病気。

バ：白くなったら、(太鼓を)叩けない。

中：末端神経が死んでしまうから・・・そういう制約がある。そういうことと折り合いをどうつけるのかという問題がある。

佐：だから長くつづけられないんですか？

バ：そう。前に引っ越しの(仕事)も入ってたことがある。でも、問題があった。偉い人、悪いってわけじゃないんだけど、親切ではない人もいる。たとえば、どんな仕事を始めたとしてもね、いま(日本語を)話せるけどね。表情を見たりして、分かることもある。だから、いまはコミュニケーションの取り方もわかっている。一番大切なのは、やる気(がんばろうという気持ち)。一番が、やる気。もし働いたとして、どんな風に働くのかをしっかりと見る必要がある。働けようが、働けまいが、みんな平等。だから、やる気がないと、できない。やる気がそこでは大事。

中：現場系の仕事やきつい仕事は、日本人でもやりたがる人は少ない。だから、そこに集まってくる人たち

はみんなニコニコしているわけではなく、ピリピリした雰囲気もあるっていう。

佐：ギスギスじゃないけど。

中：だから、ちょっとしたミスに対して、怒鳴られたり。

バ：そう、大きな声で。

中：言われると、心が折れてしまう。

バ：そうなんです！わたしの心はもう・・・だから、何かよくないことが起こると、仕事を辞めるということがあります。そうです。もし、いい人がいたら、がんばることができる。引っ越しの仕事は、たとえば、3人1組で車に乗り込んで、やっていた。でも、もしいいじわるな人がいても、文句を言ったりはしない。相手の言うことを聞く。がんばろうとする。上司に、あの人はいいじわるだとか、そういうことは決して言わない。でもトラブルがあって仕事へ行くやる気を失くしてしまうこともある。そういうとき、上司から電話がかかってきて、「どうして今日来ないんだ？」と言われます。そういうときに、はじめて説明します。なぜなら、毎日、仕事場所が変わる。ここに行って、ここに行って。

佐：グループがね。

バ：でも、誰と一緒にだとか、名前は分かります。こういう（いいじわるな）人によって、やる気をそがれるわけです。翌日、仕事に来てと言われる。他の人と一緒に、仕事に行きなさい、と。

佐：こういう問題があるんですね。

バ：はいはい。だからボスに言うこともあります。他の仕事を始めることもあります。いまは、事務所に電話します。いまね、話すことができません（笑）。

フ：怖いからですよ。言うことができません。これが、問題なんです。しかし、彼は日本に住んでいます。ときどき働きます。仕事がないときもあります。もし働いても、人間関係によって辞めることがあります。家にいます。でも1ヵ月も家に居たら・・・週末は（音楽の）ワークショップがあります。でも、これだけでは十分ではありません。毎月、月末には家や何らかの支払いがあります。もし働かなければ、奥さんだけ働いていても、彼女は疲れてしまいます。彼（夫）がしなければなりません。一緒に働くということが大事です。やる気があれば、仕事できます。いま、彼はやる気があるので、仕事を始めました。だから、いまは大丈夫です。日本で働くということは、いいことです。でもやる気、がんばろうという気持ちが大事です。月曜から土曜まで毎日、9時から18時、19時まで。これは簡単ではないですよ。だから、いつもがんばっているんです。日本人は働くということに熱心です。アフリカの人もやる気を持たなければなりません。

バ：ちょっと待ってくださいね、先輩（フォデに対して）。なぜ日本人はがんばって働けるのか。あなたたちは、ここで生まれ、ここで育っています。働きはじめる年齢になって、働いているわけです。40歳とかになるまで働いていますよね。そうじゃないと、食べることもできないし、家賃も払えないし、他の支払いもできないし、何もいいことはありません。ギニアでは、もし働かなかつたとしても、友達が食べ物くれたりします。

フ：兄弟とかね。

バ：ここが大きな違いです。

フ：たとえば、彼がわたしの弟だとします。もし、わたしが働いていなければ、給料をもらっている人が、少しわけてくれます。お兄さんに対しても。もし自分に稼ぎがなくて、ご飯を買えなくても、母親がご飯を用意してくれます。父親が家賃を払っています。

バ：わたしたちは払いません。

フ：不安はないんです。そこは。

佐：もし働かなくても・・・。

フ：働かなくても、不安はありません。

中：これが大きな違いですよ。

バ&フ：そうです、大きな違いです。

フ：もし同じようなことを日本でしていたら、これは大きな問題になります。

佐：これはストレスですよ。

フ：はい。いつも家にいるような友だちはいないでしょう？

バ：みんな仕事があります。もし働かなければ、食べることはできません。たとえば、(佐々木さんに) 1万円とかあげることはありますか？ないでしょ？

フ：100円ですら、ないでしょ？

バ：もし今日、サバールに行ったとしたら・・・。

フ：日本で1万円とか5万円とかに当たる額を、わたしにくれますよ。友だちだからね。

バ：はい。

フ：でも、日本にはこういうことはない。

バ：日本では働かないと。

フ：同じじゃない！何も手にできない。

バ：これが違います。

フ：ちょっとした違いがあるんです。

バ：いやいや、ちょっとじゃないよ、大きな違いです。

フ：そうですね、大きな大きな違いですね。日本にはこういうことはないですよ。

バ：仕事が終わったら、家にいるだけでしょ。

フ：働いて、働いて、で、家にいる。これは(わたしたちにとって) ストレスですよ。もしやる気がなければ、できません。最近、彼はやる気を出しています。働かないと、何もできません。それはそれでストレスなんです。毎朝、仕事に行って、で、休みの時に同僚や友達と話してコミュニケーションを取る。それは大事です。

バ：こういうのはないですよ(笑)！

フ：仕事へ行って終わったら、家に帰る。

バ：仕事、家、仕事、家、食べて、また家(笑)。

フ：もし家に帰ったら、お祈りして、それで終わりです。

佐：お祈りをして寝る。

フ：おう、それで終わり。

佐：そして、また朝がまた来ますね。

フ：21時には寝ますよ。

バ：21時に寝る！子どもみたいでしょ！

フ：21時に寝ます。でも、彼が電話をかけてきたりするわけです。でも、取りません。「先輩は寝ています」。で、朝になってからかけなおします。仕事だけ。がんばらないと。

バ：これが大きな違いです。

フ：ギニアと日本のね。ここでは仕事があります。

バ：あちらには仕事はありません。

佐：だから、平和なんですよ。

フ：不安はないよ。

バ：そうそう。ギニアでは不安はありません。

フ：もちろん、ギニアでも働かなければ、得られるものはありません。家族だってそう。

バ：そうそう、それは本当です。

フ：当たり前です。彼は、わたしの弟分です。彼が働いて、稼ぎがあって。彼の背後には、家族がたくさんいるわけです。

中：そう。

バ：今日ね、日本にいますよね。たとえば、フォデさんの家族はギニアにいます。もし誰かが病気になったとして、あなたがね、いい人なら、親切なら。こういうときに助ける人こそが、いい人なんです。もし、フォデさんがギニアへ行ったら、たくさんの家族や親せきがやってきますよ。お母さん、お母さんのお兄さん、お母さんのお兄さんのお兄さん。

フ：みんな来ます。なぜなら、日本から帰ってきたということは、お金があると思うからです。みんな、こう考えるんです。たとえば、日本にて、よく電話もかかってくる。もしわたしが電話をかけていなかったりすると、「なんでかけてこないんだ」と言われます。「週に一度電話をかけるということが、プレゼントだ」と。え？プレゼント？(笑)そっちからかけてくれたらいいじゃないと言うと、いやいや、違うと。こっちから向こうへの週に一度の電話がプレゼントだ。

佐：誰が言ったんですか？

フ：わたしの兄弟です。彼は、日本はいつもいいと思ってる。日本で暮らすことの大変さをわかっていない。もし日本に来れば、その違いが分かる。

佐：そういう問題なんかを話したりはしなんですか？

フ：誰に？

佐：家族にです。

フ：(話しても)理解できないと思う。

佐：あなたが説明したとしても？

フ：はい、もしわたしが説明したとしても、理解できない。みんな、わたしが嘘をついてると思う。

バ：わたしもそうですよ。わたしがまだギニアいて、日本に来たことがなかったころ、ここに来るまでは何も理解できてなかった。みんな、そうですよ。もし、ここに来たら、分かる。理解できる。みんなそう。

フ：もしギニアへ帰ったとしたら、日本に住んでいるから(ギニアと比べて)いい服やいいジーパン、あたらしい靴を身に着けていますよね。そうすると、ああ、お金があるんだと思われるわけです。分かりますか？働いて、稼いでるから、買うことができるけど・・・でも、(ギニアの人は)いろんなことを分かってません。友だちたちは、あ、いいなーと。

バ：わたしも同じですよ、みんなそう言います。ギニアを出た人に対して、こうしてくれ、ああしてくれ、と。日本での大変さを知らないから。

フ：お金の価値も違う。たとえば100ドルの価値は、日本と比べると、ギニアではとても大きいです。だから、勘違いしてしまいます。両替すると、100万、200万になります。

佐：セーファー？

バ&フ：セーファーじゃないですよ、ギニアフランです。

佐：あ、ごめんなさい。

バ：セーファーは、コートジボワールやセネガルですよ。

佐：ニジェール、ブルキナもね。

バ：わたしたちは、フランギニアです。こういう違いがあります。みんな、ヨーロッパとかフランスに行きたいと思ってます。なぜか。何も知らないからです。もし難しいって説明してもね。でも、最近はずっと理解してきつつあります。母親や兄弟、友達がヨーロッパにいたりするから。もし自分が日本に来ていなくても、何かを稼ぐことは難しいって少しは分かっていると思います。仕事ないとお土産やプレゼントを買うことができません。くれる人もいれば、くれない人もいるわけですから。その違いを少しずつ分かっているはずですよ。もしお金があれば、1万ギニアフランをあげることは簡単です。行事ごとが

あつて稼いだら、ご飯をおごつてあげたりします。こういうことがあります。働いている人と、そうではない人がいます。働いていない人は、たくさんいます。ギニアには、たくさん。もし働いていないと、稼ぐことができません。でも、誰かがご飯に招いてくれます。こういうことがあります。そうすると、働かなくてもいいやという気持ちになってしまいます。もし、誰も何もくれなかったら働かざるを得ないと思いませんか。こういう違いがあるんです。

佐：もし誰も助けてくれなかったら・・・。

フ：お父さんもお母さんも、ここにはいません。みんな、それぞれの家で暮らしています。

佐：お父さんやお母さんでも、助けてもらえないこともありますから。

バ：もし、(ギニアで)お父さんやお母さんがいて、自分が稼ぐ年齢になっていても(助けてくれる)。簡単です。とても簡単です。ギニアではなね。

佐：日本はややこしいですね。

バ：そう！すべて、ややこしい！

佐：簡単じゃないですよ。

バ：簡単じゃありません。

フ：アフリカと日本は違います。わたしたちはアフリカ人です。施しができるかどうか。施しが大事です。いま、わたしたちは日本にいます。奥さんと一緒に。でも、施しが大切なんです。バフォデさんは日本にいますが、彼は彼のギニアのお母さんを忘れたことはありません。これが大事なんです。祈ります。日本人はこういうことを理解していません。バフォデさんもわたしもお金的问题があります。お金のことばかりのように思われるかもしれませんが、それは施しという他者への祝福なんです。施しは、アフリカでとても大事です。もし、これがないとダメです。日本に住んでいても、これができなければ、何もないです。わたしたちはアフリカ人だからです。

バ：ヨーロッパとか日本にいと、普通、18歳とかで働きはじめるでしょう？あなたたちは、アフリカのことを少しは知っていますよね。ギニアでは8歳、9歳、10歳を見てみてください。日本と比べてどうですか？ぜんぜん違うでしょう？たとえば、9歳、10歳であってもヨーロッパへ行くチャンスがあるなら行きます。家族を助けることができるならね。信用するわけです。でも施しを何もしないと・・・施しが大事なんです。少しでも稼ぐなら、他者を助けなければなりません。これが大事なんです。

中：ということは、施しという行為は、働くということよりも重要視してるわけですね？

バ：はい。もし、よい施しをしたら、それがいい。

フ：友だちが稼いで、施しをしたら・・・。

バ：施しは、家族だけ、お父さん、お母さんにだけすることではありません。奥さん、子ども。誰か。みんなにすべきことです。

フ：わたしは一人友だちがいます。イングランドにいます。彼はそこで知り合いが一人もいません。食べることもできません。彼は、ゴミを食べているんです。彼はいまパリにいます。彼はゴミを食べていたというんです。週末、土曜、日曜になると教会へ行きます。そしてこうします(両手で受け取るしぐさ)。物乞いをするんです。彼は、イングランドを出てパリに来ました。何も無い。彼は、「パピエ・ラン」で来ました。

バ：「パピエ・ラン」ってわかりますか？何も書いていない白いやつ。

フ：飛行機のチケットみたいなやつで。それで来たんですよ。

バ：意味わかりますか？普通、飛行機のチケットは全部書いてあるでしょ。便名とか。でも、その人は、何も書いてないやつ。

フ：それで来た。

佐：ほんまに？

フ：飛行機の中に隠れて。いま、パリでフランス人と結婚した。彼が電話をしてきたんです。イングランドにいた時は、わたしは知らなかった。いま、Facebook でつながりました。「フォデさん、アシケンです」「え！アシケン？」「イングランドにいたとき、知り合いが一人もいなくて、ゴミを食べたよ」と。イングランドはひどい！

(一同、笑う)

フ：彼はこう言いました。「友よ、週末になると教会へ行行って、物乞いしてたんだ」。わかりますか？大変なんです。でも続けて、「いまはパリにいます。神様のご加護で。女性と知り合って、結婚して、いまは問題ありません」と。

佐：不安はないんです。

フ：そう、不安はありません。神様が助けてくれたんです。

中：チャンスをね。

フ：そう、チャンスを。女性と知り合って、結婚して。

バ：みんな、状況は違います。

フ：アフリカでは問題があります。いつか、変化が起きるでしょう。アフリカの問題（困難さ）と、欧米の問題は同じではありません。なぜなら、神様はわたしたちに黒と白という違いを与えました。色が違います。違うんです。わたしたちアフリカ人は大変です。違うんです、仕事においてもね。でも、日本に来たのなら、がんばらないといけません。はじめて来たら、気がなくなることもあります。でも、ときどき、気力を奮い立たせてね。フォデさんは4年です、わたしは2年と6ヶ月です。いまは、リラックスできるようになりました。怖いと思うこともありません。

バ：(笑)

フ：仕事もしているし、もしお金があれば、大丈夫です。幸せです。仕事をしていけばね。それがあから、がんばってきました。

バ：がんばったね(笑)。

フ：働かないと、ないもない。ゼロです。

バ：アフリカの仕事と日本の仕事の違いは、ここです。ヨーロッパとも同じ違いがあるでしょう。わたしたちはスウェーデンにたくさん友だちがいます。でも、みんな太鼓の仕事だけをしているわけではありません。他の仕事をしています。

中：塗装業とかね。

バ：そう、塗装とか。簡単ではないんです。いま、欧米の人たちは、アフリカでどんな暮らしをしているか知りません。わたしたちもここでは何も知りませんでした。でもこれは問題ではないです、お互いを知ることが大事です。それは普通です。わたしたちは、ここに来て、あなたたち（日本人）を知ります。あなたたちも他人を知ります。わたしは家に居る必要はなく、働く必要があります。いつか、ギニアへ帰ったら、他の人にここでの経験を教えることもできます。それが大事です。

佐：なるほど。

中：2つの家族がありますよね。アフリカの家族と、日本の家族と。それは難しいね。

バ：すごく難しい。

フ：もし働かなければ、何にもならない。アフリカの家族は、ここでは稼げると思っている。それが普通です。

中：お金がたくさんある。

フ：アフリカの家族たちは、日本にはたくさんあると思っている。たとえば、フォデさんもわたしも、月末に1万円とか、アフリカの家族に送る。でも、それじゃあ少ないという人もいます。みんな、知らないんですよ、ここで1万円を稼ぐために、どれだけの。

中：どれだけの時間。

フ：どれだけの時間を働いて、このお金を得られるのか。

バ：それですよ、さっき言ったのは。本当にみんな分かりません。わたしがギニアにいた時もわからなかった。でも、1回来てみたら、分かります。1万円を一度でも稼いでみたら、分かる。

佐：そうだね。

バ：これを分らないと、要求ばかり。信用できなくなる。

フ：働いているから分かるけど、それに耳を貸さないと人もいる。電話を切られてしまう。

バ：日本に来て、どうやって1万円を稼ぐのか。それをやってみたら、わかるだろう。そうしたら、ほら、言ってた通りでしょ、ということになる。

(一同、笑う)

フ：その通り。ギニアにいる人は分らないから。

佐：想像してるだけ。

フ：そう、想像だけ。

バ：もし、日本を出て、ギニアへ帰ったとしたら、みんな知らないから、ちょうだい、ちょうだいと言う。わたしはそれに応えます。でも、少しずつでも増えてくると、多くなる。どれだけの時間をかけて、これを稼いだのか。だから、友達にも、自分が外に出られるようにがんばれ、と言う。もう助けられないよ、何もないからね、でもチャンスあげることはできる、と。もし、いいと思う女性がいたら、後押しするように協力するよ、と。応援するよ、日本に来られるように。そして、いつかその人が日本に来たら、「ああ、本当だった」って言うに違いありません。そういう考えがあります。直接助けることはできません。でも、応援することはできます。日本に来たら、一緒に（音楽の仕事をする）ことができます。本当に、みんな分かりません。説明しても分かりません。お金が違うから。1万円をあげても、少ないとか、あつという間になくなってしまふとか、言います。この金額をどうやって稼ぐかを知らないからです。

佐：だから、簡単に思うんですね。

バ：そう。

フ：そういう想像があるんです。お金を稼ぐこと、仕事をするを知らないんです。

バ：フォデさん、がんばろうね。

フ：むずかしい。

中：もし問題があると、海外にいる人にすぐ電話をしますよね。助けてください、こんな問題があつて・・・と。

フ：ああ、あなたはよく知ってますね。ああ、お腹すいたー、とかね。

バ：もし海外に友だちがいて、助けてほしかったら、こうします。自分もそうでした。知らなかったから。電話して、助けて、こうで、ああで、と。翌日も同じようにね。わたしもそうでした。

佐：いま、あなたは理解したんですね。

バ：ここに来てね。

佐：あなた自身も変わったということですよ。

バ：はい。わたしより前に日本に来ていた友だちたちは、ここは難しいよと言っていました。でも、わたしは理解できなかった。ここに来ないと分らない。頭のなかでは、日本に来たら、稼ぐことができると思っていました。でも、ここに来て、分かりました。ぜんぜん違います。

フ：アフリカにいる人はすべて、そう思っていますよ。アフリカは厳しいからね。ヨーロッパをめざし船で繰り出す人もいます。

佐：とても恐ろしいですよ、それは。

フ：船に乗って出かけたなら、海の上で死んでしまうこともあります。飛行機のなかの貨物部分に潜り込んだ

人もいます。その人は死んでいました。

佐：あらら。

フ：みんな、アフリカを出たい、ヨーロッパに行きたいと思っているんです。たくさんの方が。ギニアだけではありません。アフリカ中にいます。みんな、アフリカを出たいと思っています。もし仕事があれば、確かにそうですよ。

バ：もし問題があるとしたら、それは何か。仕事です。仕事があれば、いいですよ。アフリカにも仕事はありますよ。

佐：だって、アフリカには不安はないわけでしょう？

バ：はい、そう。なぜか。日本で働けば、物を買えるし、食べることもできます。ギニアでは、お金とは実に簡単なものです。働かなくても、どうにかかります。こういうことに慣れてしまっています。でも、いま、何も稼げなければ、悲しいですよ。ヨーロッパに友だちがいたりして、簡単になってるんです。でも、そこでは車もないし、何も買えませんよ。

フ：バフォデさんやわたしがいま言ったように、施しなんですよ。彼は日本に来ました。もし彼に家族があって、家族にお金がなければ、彼は助けます。日本に来るために15,000,000ギニアフランとかを日本までの交通費を支払うことはできません。だから施しをするんです。彼は日本人の女性と知り合って、彼女が来日を手助けしてくれました。これはチャンスです。神様がそうしてくれたんです。白人とアフリカ人は違います。でも、神様は日本に来るチャンスをくれたんです。だから、がんばらないといけません。

バ：わたしはアフリカのみんなを日本に呼んであげたいです。もしお金があるなら、燃料を買って、無料で呼んであげたいですよ。

佐：それはいいですね、日本にはいま、お年寄りばかりしかいないから。

バ：もしお金があったら、50人ぐらい招待してあげたい。

佐：日本にとってもいいですよ、日本は変わりますよ。

バ：どうしてこれがしたいかと言うと、もしみんなが来たら、いい仕事ができると思う。みんなここに来たがっているから。こう思います。神様が望んでいるならね。

フ：アフリカでは、話してきたように問題があります。難しいです。なぜかと言うと、その理由の一つに、大統領の問題があります。

バ：(笑)

佐：日本が？

フ：いやいや、アフリカです。

中&佐：わたしたち日本も同じでしょう。

バ：え！

フ：いま、ギニアの大統領はよくない。ギニアは、大統領がよければ、いい国になる。

佐：すべてのアフリカに言えることでしょう。

フ：はい、そうです。いい資源がたくさんあります。欧米から、それらの資源を求めて、たくさんの方が来ています。鉱山とかね。アフリカを兄弟やいとこだと思って、分かち合うことができた方がいい。でも、そうではない。わたしが大統領なんだから、みんな言うことを聞け、という態度ではよくない。大統領は大事なことを忘れてしまっている。わたしはこれをする・・・と。身内ばかりひいきをする。これでは、遅れるばかりです。実際、ギニアでは、みんなこういう状況に疲れてしまっている。でも、これがわたしたちの国なんです。

バ：大統領の問題はあるけど、ギニア人は、水道と電気があれば、まずは満足できる。この2つが問題。これがないとダメ。これがすごい問題。1996、97、98年頃のシステムはよかった。水も電気もあった。

佐：ええ？じゃあ、いまはどうして？

バ：いまは、どうしてか。それですよ、さっきから話しているのは。世界で、毎年システムは変わっていく。ランサナ・コンテ大統領、彼は初代ではないです。初代は、セク・トゥーレ。彼はとてもよかった。初代はとてもよかった。二代目もすばらしかった。ランサナ・コンテ。

フ：彼はみんなのために働いた。

バ：ランサナ・コンテが来て、彼は、セク・トゥーレの考えを引き継いだ。そのあとで、政治的混乱が起こった。

佐：彼が混乱を起こしたの？

バ：違います！

フ：セク・トゥーレが亡くなって、ランサナ・コンテが亡くなって・・・

佐：3人目が？

バ：いいえ、ちょっと待ってくださいね。

(一同、笑う)

フ：3人目は軍人の、ムサ・ダディス・カマラでした。彼が来たことによって、混乱した。いまはブルキナファソにいるけど。

佐：あ、そうなの？

バ：3人目が来て、クーデターを起こした。彼がいた1年間、何もいい事をしなかった。彼は実は、大統領選挙の準備のために就任した。しかし、彼は、そこを去りたくない、自分が大統領のようにふるまいたいと考えた。だから、みんな、賛成しなかった。彼の友達 came。

(一同、笑う)

バ：あ、本当のことですよ。混乱ばかり。

フ：いま、バフォデさんが話したようなことがあるから、みんな疲れてしまうんです。いま、ギニアはよい国です。フォデさんが言ったようにね、97、98年ごろはとてもよかった。いつも電気があった。

バ：ほんとうによかった。

フ：シディア・トゥーレさんはよく働いた。コンテ大統領の考えは、よかった。シディアが来て、24時間いつも電気があった。シディア、みんな彼を支持した。彼はできたはずだ。彼は彼がすべきことを知っていました。たとえば、電気の工事をしたいのに、医者を呼んでどうする？医者は治療することはできますが、電気の工事はできない。何も知りません。電気を国中に送る、これは誰がするのか。

佐：無理ですよ。

フ：何も知らなかったら、何もできないですよ。ギニアの問題はこれですよ。疲れます。いつも。

佐：今も？

フ：そうです。アルファ・コンデ。

バ：彼は5年間・・・。

フ：え？5年？何の5年？セク・トゥーレがアルファ・コンデを見出したわけです。彼の権力のおかげです。実際、アルファ・コンデはずっとヨーロッパにいました。みんな、彼に期待したわけです。でも、彼が就任して・・・何もしていない。彼はマリンケ族です。日本は日本人だけでしょう？ギニアは、違います。スス族、マリンケ族、プラ族、キシ族、ベセ・・・5つの主要言語があります。スス族出身の大統領ならスス族を助けます。

バ：そう！

フ：スス族の大統領は、マリンケ族と縁がない。だから、気かけないわけです。

バ：こういう国はよくないです。

フ：だから発展できない。プラ族の人はプラ族のみ、これでは発展できません。マリンケもススもみんなを

助けなければならない。

バ：関西、東京、神奈川、いろいろあるでしょ。でも日本人は日本人。友達が、道はきれいでしょう。食べ物をもし道に捨てたりしたら、これはとても恥ずかしいことです。いつもきれいでしょう。ススとマリンケは・・・たとえば、スス族出身の大統領が出たら、マリンケの人は嫌がります。これはよくないです。みんな一緒です。こういう風になったら、町もきれいになります。スス族はスス族の大統領を、マリンケ族はマリンケのを、それがよくない。

フ：これはよくない。問題です。

バ：アルファ・コンデはマリンケの人です。

フ：みんな、マリンケ・・・。

バ：フォデさんもマリンケだよ？

フ：アンファンはススです。これが問題です。わたしたちも家族がいます、わたしは日本に来て。発展している国を見るとよく分かります。ギニアに居た頃はわかりませんでした。

佐：長い間、こういうエスニックグループの問題があるんですか？

フ：いいえ、そんなことはありません。

バ：どうしてこうなったか。97、98年のことはなかったです。

フ：そう、ランサナ・コンテの時代にはなかったです。彼は、いい仕事をしていたから。とてもよかった。

バ：とてもよかった。

フ：初代はススの人でした。彼は、プルにもススにもマリンケにも、みんな平等にしていた。

バ：でもクーデターが起こって、ダディス・カマラが来て、アルファ・コンデが来て。

フ：こんなことじゃ、疲れる。2015年の年末にもう一度大統領選挙あると思う。

バ：またある。

フ：ヨーロッパにいる人が大統領選挙をアレンジするだろう。・・・1月、2月に病気、エボラが来てしまった。ヨーロッパの人たちはギニアを援助してくれました。病気もいつも衛生面がよければ、解決するだろう。

バ：エボラは、動物の病気だと思っていた。

フ：そう。いまは、違う。でも、いまは、不衛生にしているとよくないということが分かった。手を洗いなさい、食べ物をよく管理しない、と言われるようになった。少しずつ良くなっていくだろう。大統領もその点に注意を払うだろう。もしお金があるならば・・・大金があったとして、もしそれを大統領が自分のポケットに入れてしまったら？

バ：神様は知っている。わたしたちは分からない。大統領が隠したら。でも、神様は見ている。よくないことは何か。大統領がコロコロと意見を変えることだ。いつも、いつも。ギニアでは、50年も遅れを取っている。独立してから51年。たくさんの遅れがある。アルファ・コンデが来た。ギニアの人が幸せになるためには、水と電気。誰が大統領になると、このことをしっかりすべきだ。これは大変なこと。大統領がこれを解決さえすれば・・・ランサナ・コンテが終わって、ダディスが来て、いまの大統領になって、ずいぶん時間が経過した。しかし、水も電気もない。女の子がタンクをもって遠くまで水汲みに行く。これは大変。水はちょっとしか出ない。水がないと、人は死んでしまいます。これが問題です。アフリカはこうです。ギニアには水も電気もない。

中：水も電気もないのに、エボラがある。今年、2015年、外国人観光客はいないでしょう。つまり、現地での音楽やダンスのワークショップが開催できないということですよね。今年。

バ：もしワークショップを開催したら、友達たちも一緒に働くので、食費を稼ぐことができます。お金も入ります。それは、何もなかったら。今回とても悲しいことです。

中：バフォデさん1人がギニアでワークショップツアーをするなら、そのために人を集めます。集まった人たちはそれぞれが稼ぐことができます、稼ぎがあれば、それぞれの家族を助けることができます。だけ

ら、バフォデさんは1人ですが、友達や家族がたくさんいるんです。

フ：彼が外国人を連れてギニアへ行けば、彼の友達の太鼓叩きたちが彼を助けてあげます。みんな稼ぐことができるので喜びます、家族を助けることもできます。でも、エボラのような病気があると、行事もありません。ワークショップもありません。日本、スウェーデン、フランス、アメリカ、どこからも来ません。病気のせいで。だから、向こうはいまとても厳しい状態にあります。

佐：仕事がないということですね。

フ：そう、仕事がありません。今年。

中：12～3月は、ミュージシャンたちにとっても、重要な時期です。この期間は乾季です。

フ：毎年、12月、1月、2月、3月はワークショップをする時期です。

バ：3月までのあいだに仕事をして、お金を稼いで、自分の家族を助けるというのは喜びもあります。これがないと、大変です。

中：それで一年過ごせるわけではない。12～3月に稼いでも、6月頃にはすべてのお金は無くなってしまいます。でも、次の活力につながるじゃないですか。お金は置いておけないけれど、1年がんばるために、この短い期間がんばって、稼いで、みんなを養って、みんながうれしい。あとはもうお金はないけれど、次がある、と。雨季とかラマダンとかを乗り切れる。

バ：ラマダンが終わるころには、次のことを考えはじめている。だから、がんばろうって思える。

フ：前はそうだった。

バ：前はそうだった。お金はなくなってしまうけど、気力は残る。また来年になったら、と。

フ：来年になったら、またワークショップツアーがある。そうなれば、大丈夫だと思う。がんばれる。

中：だから、いまは厳しいですね。またみんな電話してきますね。

バ：ああ、みんな電話してきますよ。いつも。

フ：いま、大変よ、ちょっと。

佐：外国人来ないし。

中：日本人いない、フランス人いない。仕事ない。すごい大変。

バ：大変だよ。

中：ここが日本人と違いますね。

フ：お金の問題が・・・。

中：わたしたちは分かります。ああ、こういうシステムがあつて大変だなあと。分かりますが、たとえば、それぞれの奥さんは違う考えがありますよね。なぜなら、彼女たちにとって一番大事なものは、日本の家族です。

バ：そうです。

中：アフリカの家族ではありません。日本の家族です。もし子供がいたとしたら。だから、ここのバランスが難しいところ。

佐：どうして、アフリカに送金ばかりですかの！って言われるでしょう。

バ：わたしはそうじゃないよ。ギニアを出て、日本に住んでいます。もしすべてをギニアに送ってしまったら、それはダメでしょう。一番はここです。

佐：少しは送るべきでしょう？

バ：もしここで稼いだとしたら、わたしはここで暮らしていますよね。アフリカにも送ります。もし誰か病気なら知らせてと言っています。食費程度は送ります。みんな、わたしのことが頭にあります。だから、もし自分が送金しなかったら、自分も喜びを得られません。

フ：さっき中川さんが言ったように、奥さんたちにとっては日本の家族のことが一番です。ギニアには家族はありません。

バ：でももし現地に行ったら、分かります。家族のことや、いろんなことが。だから、もしギニアの家族のことを考えてもらえないとなると、辛いものがある。ここは難しい。

佐：難しいけど

バ：もしそこを知らないなら、仕方ないけれど、知っているんだから・・・もし稼げたら送ってもいいでしょう。

中：ここのバランスが難しい。

フ：そうです。

中：もし、一切送金しなかったら、これは大きな問題ですか？ギニアの家族に。

バ：もし送らなかったら、それは問題ですよ。みんな怒ります。自分たちのことを忘れてしまったんだ、と思います。

佐：ああ、そう思うんですね。

バ：一切送金しなかったら、そうなります。

フ：月末に給料をもらいますよね。たくさんじゃないですよ。1万円とか。食費のために。1カ月で。

バ：たとえば、ヨーロッパに誰かが出て行っている家族があるとします。その家族がどういう状態なのか、みんな見えています。お互いに見えています。その家族はいつもちゃんと生活できているなあとか。そういうなかで、家族の誰かが海外にいるのに、ちゃんと生活できていないと、みんなにそれを知られてしまう。それはとても恥ずかしいことです。

中：そこがね・・・こういう考え方あるのはよくわかりますが、奥さんたちの気持ちも分かるのでね・・・(笑い) 2つの側面があります。バランスをよく考えるべきですよ。

バ：わたしにとって、それは難しいことではありません。稼ぎを分けて、送金するということはむずかしくありません。たとえば、もし5千円稼いだら、5千円送ります。全部自分のものにするということはありません。稼げたら送るし、稼げなければ送らない。それだけです。

フ：それが大事です。

中：日本ではこういうシステムはあります。全くないというわけではないけれど、慣れているわけではないです。

バ：もしアフリカに行ったら、あなたの夫がアフリカの人だったら、わかることです。わたしたちはアフリカ人です。だから、アフリカのこと、関係ないとは言えません。少し大変だけど、理解して、バランスをとって。これは問題ではありません。もしたくさん稼げたら、さらに簡単です。半分とか。わたしは送ることができます。

中：大変だね。

バ：もしわたしが稼げたら、送ると言うだけでとても単純です。一番は日本(の家族)だけど、でも、向こうにも送ります。いつもではないです。1カ月に1回とか。米や野菜を買うために。

フ：毎日じゃない。1回だけ。

佐：月に1回とかね。

バ：もし、問題とか病気とかがいつ起こるかはわからない。だから、それもあります。

中：食費は1ヶ月に1回。でも、何かの問題や病気とか。

フ：これはびっくりしますよ。なに？って。

バ：たとえば1年間、向こうに行ったらとします。向こうの大変さを分かります。いまは、たとえ海外に出たことはなくても、少しずつ理解してきます。どうやって稼ぐのかってことも。電話あっても、難しいよ、簡単じゃないよと言う。1万円とか送るとすると、それが励みになる。それをみんなで分ける。

フ：5人6人で1万円を分ける。それはとてもうれしいこと。

佐：これは、みんなを励ますんですね。

バ&フ：そうです。

フ：だから仕事をがんばられるんです。ときどき、電話がかかってくる、「そこは簡単ではないね」と言います。6時に家を出ているわけですから。そして、いまでも寒いですよ。わたしたち、日本人はこんな寒さに慣れていません。

中：寒い！

佐：寒いよね。

フ：でしょう。雪が降ったりしても、仕事にいかねばならない。簡単ではありません。日本ではいつもがんばらなければならない。もしがんばったら、アフリカの家族を助けることができる。もし働かなければ、どうやって養うことができるのか。家族みんなが、自分を見ている。もし働かず、助けなければ・・・。

バ：家族の考え。お母さんだけでなく、お母さんの妹とか、みんながフォデさんを頼りにしている。何か助けてほしいことがあったら、フォデさんのところに電話がかかってくる。

佐：みんな頼りにしてるんですね。

フ：仕事をがんばる理由はこれです。

バ：でももし仕事をしていなくて、でも、問題が起きたら、お金はどうする？

佐：だから働かないといけないんです。

フ：だからがんばるんです。わかりますか。わたしはギニア人です。ギニアでは毎日働いていませんでした。でも日本に来て、毎日働いています。いま、病気になったら働くことはできません。日本では疲れるまで。

バ：いやいや、死ぬまで。

フ：働くんです。死ぬまで。でも、わたしたちは若いです。まだ若い。日本人とかは60歳になっても働いています。家族のことを考えて、がんばって仕事をしています。これが大きな違いですね。女性、奥さんの違いはここに 있습니다。わたしとわたしの奥さんは・・・日本人の女性は、男性のようです。

佐：日本人の奥さんは？何？

フ：奥さんとか旦那さんとか、全部する。アフリカでは、アフリカ人同士で結婚すると、全部は旦那さんが一番。

バ：意味はわかりますか？

佐：フランス語で。

フ：もし結婚したとします。日本人だろうと、アフリカ人だろうと、日本では女性が家を仕切りますよね。もしアフリカ人同士で結婚したとしたら。

佐：アフリカ人の女性と、アフリカ人の男性ね。

フ：家を仕切るのは男性です。すべてのことを。

佐：女性は従うのね。

フ：はい。

中：旦那さんに？

フ：いやいや、違います。もし結婚すると、日本人の女性とアフリカ人の男性。

佐：あなたたちみたいに？

フ：そう。どう言ったらいいんだろう。誰が家を仕切りますか？

佐：もしわたしがアフリカの男性の結婚したらってこと？

フ：はい。

佐：それは状況によるんじゃないですか？

中：日本に住んでる場合？

バ：いま、アフリカでは結婚したら、夫が責任を持つ。すべての責任を。夫が外で仕事をして、女性は家の

ことをする。夫は仕事だけをすればいい。女性は服を洗って、子どものことも女性がする。責任は男。日本は、フォデさんが言おうとしてるのは、日本は、システムが違う。

佐：責任は誰？

バ：二人はやらないと。

佐：同じ？

バ：このバランスが。わたしは日本人と結婚しているでしょう？だから、2人のバランスをとらないと。分かる？

中：夫だけで決めることはできない。

バ：そう。

佐：それはアフリカ人だけではないですよ。日本もあります。同じです。日本人だろうが、アフリカ人だろうが、夫婦と一緒に家庭の責任を持つということは同じ。昔は、(日本も)家の責任は男だけが持った。

バ：いまは。

佐：変わった。

バ：たまに、テレビで見たことがある。そういうシステムが嫌いな人もいる。男性が座っている。女性がいろんなことをしている。みんな、それを見て、ああこれは嫌い！ということがある。

佐：女の人だけが働くこと？

バ：そう。全然男は動かない。こういうのはやりたくないという人もいますよね。俺はこういうことはやりたくない、と。嫌い、と。

中：そういう人もいる。

佐：いるいる。

バ：いるんじゃない？

佐：ちゃんと料理もするし、子育てもするし、という人も旦那さんもいるし。

バ：そういう風に2人がしている人も多い。わたしはこういうこと嫌いじゃなくて、好きです。

佐：家事とか？

バ：家事とか。いま、やってますよ。

中：スパゲティ上手よね。

バ：スパゲティとかいろいろ作って。それはアフリカではやらない。でも、ここは自分で。一人しかいなかったら、誰が作るの？

佐：あなたが作る。

(一同、笑う)

中：ということで、いまは、日本のシステムにずいぶん慣れたということですよ。

バ：そうです。

佐：すばらしい。いいのかな、それは。こういう日本のシステムについてどう思いますか？

バ：いいと思います。すごくいいです。ギニアでは。

フ：ギニアでは、これをしろ、あれをしろ、と。

佐：女性が全部するんですね。

フ：そう、全部。

バ：いやいや、女性じゃない。もし結婚したとしたら、これをしろ、あれをしろということができる。もし独身だったら、家族のなかで養ってもらえます。もし稼ぎがあって、家族を養っていたとしても、お金がなかったら、家族が助けてくれます。

佐：よくできるよね、アフリカのシステムは。

バ：でも日本のシステムも、いいと思います。わたしは好きです。

中：ほんとう？

バ：本当ですよ。結婚したでしょう。いま、子どもがいるし。一人がこういうことをやらないと、二人の子供をどうにもできない。

佐：ちっちゃいからね。

中：よく理解してますね。

バ：エッ！

フ：いまはこうやって理解してるんです。理解していつてるんです。日本に来て、日本での問題も知って。

バ：もっと長くいたら、もっと理解できます。

フ：本当にそうですね。

中：少しずつね。

フ：今日もね、わたしは彼の家に泊まっていました。朝ね、彼は子どもをお風呂に入れて、2人のね。奥さんはカフェの準備をしたりしてね。

バ：その通りです。

フ：そういうのを今日見ました。よくわかりました。

バ：一人じゃできない、これ。

フ：これはいいことです。奥さんがこうやって、こうやって。一緒に。奥さん一人だけがいろんなことをするのはよくないです。でも、少しずつ。そうすることでよくなります。彼が幸せだと、わたしもうれしいです。日本でのすべてのことがうまくいくと、とてもうれしいです。

佐：それがいいんですね。それ、大事ですね。もしあなたがうれしくて、幸せなら、いいですね。もしよくないことがあったら、それは問題だから。

バ：わたしは知らない。明日何が起きるかはわからない。今日のことは分かるけれど、明日のことは分からない。誰もわからないでしょ。今日ここにいることは分かる。寝て、明日が来たら、何があるのかは分からない。

佐：分からないね。

バ：誰も分からないから、今日のこと、今のことは分かる。

佐：いまが、大切。

バ：そう。

フ：でしょ？

中：もしね、いま、家族がいるけど、もし家の近くに友だちとか、もっと人がいたら、もっといいでしょう？日本は、家族しかいないでしょう？だから、仕事へ行って家に帰ってくるだけ。奥さんと子供たちと家にいる。もし仕事がなければ、いつも家にいる。家族と一緒に。

バ：これはシステムだから。

中：これは、日本のシステム。

バ：もし友だちがいたら、みんなが近くに住んでいたら、アフリカのシステムだけど。みんなとコミュニケーションを取ることができますよね。朝起きて、おはようとあいさつする。コミュニケーションがありますよね。もし食事を作ったら、招待することもできます。コミュニケーションがたくさんあります。たとえば、友達がまた誘ってくれるということもあります。でも、日本は違います。家に居て、ご飯を食べているか、食べていないかは知りません。

佐：日本では隣の人に挨拶もしませんからね。

フ：その通り。

佐：これはおかしいでしょう？

バ：これはシステムでしょう。これを初めて見たときね。朝、誰かに会って、おはようと言っても、そうい

うシステムがないのなら、それに従います。仕事行って、家を買ってきて。

フ：もし、挨拶しても、何も返ってこないとしたら。アフリカでは挨拶して、それに返さなければ問題です。なぜ、挨拶しないんだ、と。

佐：もし、わたしがおはようと言って、でも返してくれたなかつたら、気分悪いですよ。

フ：そうです。

バ：おっしゃる通りです。もしここで、こんにちはって言って、相手もこんにちはって返してくれたら、うれしいです。感動します。

佐：はい。その通りです。

フ：その通りです。でもシステムに従います。おはようと言って返答がなければ、もう次からは言いません。次には無視して、通り過ぎます。それだけです。

佐：はい、それは。

フ：悲しいでしょう。

バ：もしわたしがここに来て、あなたたち2人がいたとしたら、こんにちはと言います。あなたたちがここに来て、わたしがいたら、あなたたちは、わたしにこんにちはと言うべきです。これが普通です。でもアフリカにもありますよ。こんにちはと挨拶しても、返さない人もいます。これはよくないです。挨拶は大事です。たとえば、話をして、どこどこへ行くと言ったとして、そこがいいとか悪いとか話ができます。でも、単に通り過ぎていだけなら、何も生まれません。こういう人もいます。でもシステムに従うしかありません。みんな忙しいです。電車の中で押されても、放っておくしかありません。

フ：アフリカだと、もしぶつかったりしたら、「おい、なんだよ！」とたくさん言葉が出てきます。

バ：たくさん話します。

フ：もしそのまま通り過ぎようとしたら、「おい、どこ行くんだよ。何か言うべきだろ」と。

佐：これがコミュニケーションでしょう。これが人間でしょう。ぶつかって何も言わないなんて！

フ：そうですよね。

佐：アフリカ人だろうが、日本人だろうが同じですよ。

バ：ちょっと違うでしょう？

佐：いやいや、同じ人間なんだから。誰かにぶつかったら何か言うべきです。アフリカ人だからとか関係ないです。

バ：うーん。なんで、違うというかと。車の中で、普通はすみませんと言うべきでしょう。それで済むんだから。

佐：ちょっと何か言うとか、ジェスチャーで示すとか。

バ：それがありませんよね。

佐：こういうのがあれば、違いますよね。

バ：そういう人は少ない。

中：大都市では特にね。

佐：みんな忙しい。

バ：何かしてる。

中：他人を見ていない。自分のことを考えてる。

バ：誰かにごめんなさい、と言って、大丈夫？

フ：ああ、大丈夫、大丈夫。

バ：と言う風に。これはとても大事です。コミュニケーションがはじまりますよ。いつかまた会うかもしれない。

フ：朝の電車、本当に大変！

(一同、笑う)

フ：電車とか見て、びっくりした。

バ：朝は忙しいから、みんな。

中：大変だよな。

佐：渋谷とかね。

バ：渋谷とかすごいよ、朝とか。

佐：殺人的だよな。疲れてきた？時計を見てる。疲れたんじゃないですか？

バ：水を飲みましょう。

—休憩後—

中：では、もう少し詳しく聞きたいところなんかをやっていきましょう。

フ：はい、質問してください。アフリカで調査をしているんでしょう？

佐：はい。

フ：長い間。

佐：ええ、長いです。

中：彼女は、ニジェールで仕事をしていました。

フ：5年ですよ？そう言ってましたよね。

佐：わたしは4年住んで、そのあとは、ニジェールやブルキナを行ったり来たりで、トータルで10年です。

中：10年。

フ：おお、それではアフリカをよく知ってますね。

佐：サヘル地域だけですよ。

フ：そう。

佐：サヘル・・・とっても暑い地域です。

フ：そうですね、暑い。ギニアに行っても、いいと思いますよ。

佐：はい、もちろん行きたいです。インシャラ。

フ：インシャラ。

佐：わたしは日本でたくさんのニジェール人を見てきました。あなたたちのように日本人と結婚した人たち。みんな、日本の生活はとても厳しいと言います。仕事もです。とても疲れると。だから、彼らは日本はよくない、ニジェールに帰りたいと言います。でも、問題ばかり話されると、わたしも残念です。あなたたちのように、良い部分についても触れてくれると、わたしは希望を持てます。ありがとう。

バ：ありがとう。

佐：ギニア人とニジェール人とでは、性格（精神的なもの）が違いますよね。それぞれ。

バ：それぞれがね。

フ：それが普通ですよ。わたしたちはアフリカ人だけど、その精神は均質ではありません。

佐：だから、(いい話をしてくれて)よかったです。

フ：ありがとう。

佐：わたしは日本人です。アフリカのことも知っていますが、日本人です。だから、日本はよくない、日本には希望がないとか、日本人はやさしくないとか言われると、わたしは辛いです。傷つきます。

バ：わかります、わたしも同じです。わたしはギニア人です。もしあなたがギニアに来て、ギニアはよくないなんて言われると、傷つきます。でも、あなたがギニアでがんばってくれたら、わたしはとてもうれしいです。

フ：そう、それを話してたんですよ。ニジェール人とギニア人、違いますよね。わたしや彼は、日本人はいい、やさしい、と思っています。全員じゃないけれど、そういう人たちに会っています。日本人の心

はすばらしい。それを言いたいです。とてもやさしいです。全員じゃないけど。

バ：しっかり話といてよ！

(一同、笑う)

フ：ええ、全員じゃないです。でも、わたしが会った人たちはみんなやさしいですよ。みんな。たとえば、ライブがあるんですけども、今度。(会社の人たちは)子どもを連れていくよ、と言ってくれます。会社でアフリカ人はわたしだけです。大きな会社ですよ。東京と大阪に広島にあります。先日、忘年会がありました。日本人はたくさん来ます。でもアフリカ人はわたしだけです。

バ：楽しいですか？

フ：わたしはほんとうに楽しい。みんな、一緒にやろうって、どこ行くの？フォデさん！と話しかけてくれます。

佐：そういうとき、お酒はどうするの？

中：飲むよ(笑)。

バ：(笑)

佐：お酒もあるし、豚肉もありますよね。

フ：はい、お酒も豚もあります。豚肉は食べません。

バ：え、彼は豚肉を食べますよ。

フ：いいえ、食べません。

バ：食べないの(笑)？

フ：もし日本人がくれたら、食べるかも。

バ：だって、昨日二人で、ラーメン屋さん行った。それは本当だよ(笑)。

佐：それはポークじゃないの？

フ：それはポークじゃない。

バ：え！とんこつ！

フ：ポークはこれは食べられない。

バ：でも、昨日とんこつを二人で食べた。

フ：あー、もう！ちょっと待って、ほんと。なにこれ・・・。

(一同、笑う)

佐：それは大変だよ、宗教の問題。

中：いろいろいるから、大丈夫。

佐：それならよかったけど。もしあなたがとても厳格なムスリムだったら、ここでは大変ですよ。でしょ？

バ：はい、そうです！

佐：ムスリムとしては、生きづらいですよ。

フ：とても難しいです。

中：彼女は、とても敬虔なムスリムの友達との経験があるから。

フ：ああ、わかります。日本に来たばかりのときは、お祈りも毎回していました。朝、仕事を始める前。

3ヶ月間は、毎朝、毎晩。でも、会社で仕事を始めると、すべての祈りをするのは難しいです。

佐：ああ、そうですね。

フ：敬虔なムスリムだと、大変です。

バ：日本ではそれは難しいよね。

佐：日本では、そもそもイスラーム教について知ってる人が少ない。イスラームと言えば、テロとか。いいイメージがない。

バ：誰が？

佐：日本人。

フ：ムスリムと言えば、アルカイダとかね。

佐：そう。アルカイダとかボゴハラムとか、そういうのがあるから難しいよね。偏見が。

フ：彼女の言う通り。

バ：そうだよ。

佐：すごいいい面があるでしょう。アフリカでのイスラーム教は。お互い助け合い、分かち合い。それはとてもいいことです。もし、あなたが日本に来て、本当のムスリムとしての実践をすることは難しいですね。

バ：はい、難しい。

フ：わたしは、アフリカへ行って、そこで暮らしてるからね。

佐：難しいよね。

バ：もし、あなたがムスリムですと言っても・・・人に言うか言わないかは、その人の判断です。もし隠していても、神様は見ているでしょう。これが大事です。心が大事です。みんなの前でお祈りをして、みんなが見ているからお祈りしている、ということにはならない。心のなか。

佐：示す必要はない、と。

フ：もし職場の人とうまくいかなくて、あなたは悪くなかったとしたら、それを神様は見えて、知っています。そこです。あなたがやっていることを神様は見えています。あなたがどうしているか、神様は見ているんです。

佐：ありがとう。

フ：アフリカでも同じです。

佐：教えますべて違います。わたしもいろいろ学ぼうと思います。

フ：がんばって。

佐：ありがとう。

バ：ありがとう、今日はありがとう。

中：何かありますか。働くことと家族の話はしてもらったかな。

バ：質問あったら、どうぞ。

佐：わたしは、あなたたちの夢を聞かせてもらいました。日本で働いて・・・わたしは、あなたの家族、あなたの妻が・・・なんて言うんだろうな。あなたたちが日本で感じたことは分かったけど、あなたたちの奥さんとか、これまで大変だった、もちろん大変だったけど、奥さんたちの考えも変わったりしてきたのかなあ、と思って。それについて説明してくれますか？最初はすごくケンカもあったんじゃないですか？もし、話しにくかったら構いません。個人的なことだから。

フ：いやいや、大丈夫。もし誰かと結婚して一緒にいたら、二人とも仕事をして、それを分けて・・・そうならば、問題はないわけで。そうならばいいなど。

中：最初、たとえば、フォデさんの奥さんは最初、ギニア的なやり方というか、そういうことは知りませんでしたよね？

フ：はい、知りませんでした。

中：わたしは、彼女は変わったと思うんです。あなたたち、ギニアのやり方になじむために変化があったんじゃないですか？たとえば、言葉もそうですよね。

フ：はいはい、わたしの妻は最初ちょっと大変でした。約9年間、ギニアと日本を行ったり来たりしていました。

佐：じゃあ、ギニアの文化とかをよく知ってるんじゃないですか？

フ：はい。

佐：生活とか。

フ：はい。彼女はときどき、わたしの家族の問題に直面していました。送金の問題とか。彼女は応じてくれました。

中：結婚前に？

フ：いや、結婚前にはありませんでした。一緒にいるようになって5年です。はじめの4年間は特にコンタクトはありませんでした。ただ、彼女はギニアに来て、ダンスをしたり・・・。

佐：友だちってことですね。

フ：そう。ダンスをするために来ていました。それから少しずつ知り合うようになって・・・でも、彼女はアフリカのことをあまり知りませんでした。それから、5年間一緒にいて。結婚しようと決めて。

佐：お互い理解しあった、と。

フ：5年間。2008年から付き合いだして、2012年に結婚しました。日本に来るためのVISAを取るのはいです。(在ギニア日本)大使館へ行きました。そこにはたくさんアフリカの人がいました。日本に来るためにね。奥さんがそこへ通ってくれて、1週間後、あなたの夫はVISAを取得できますよ、と連絡が来たんです。最初、信じられなかったそうです。もらえない人も多いですから。でも、わたしはもらえました。日本に来て、奥さんの家族はアフリカ人に会ったこともありませんでした。彼女のお母さんは当初、とても困っていました。お父さんはいい人で、はじめてわたしを見たとき、喜んでくれました。お父さんは、これを決して忘れません。お金のことは分かりませんでした。お父さんはわたしにお小遣いをくれました。1万円とか、2万円とか。はじめて会ったときにお父さんが。わたしはこの価値が分かりませんでした。妻も、いい、いい、いらないとはいいましたが、お父さんは、いやいや、と。

佐：お前にあげるんじゃない、と。

フ：それで奥さんが受け取りました。でも、当初、お母さんの理解を得るには難しかったです。

佐：いまは？

フ：いまは大丈夫です。お兄さんやその家族・・・いまは、大丈夫です。お母さんともコミュニケーションを取れてるし、家に行って、ご飯を一緒につくって、食べたりします。

佐：ギニアの料理を？

中：家が遠くないもんね。同じ町ですよ。

フ：はい、近くです。5分ぐらいです。

バ：近いね。わたしは遠いんだよ。

佐：どこなんですか？

バ：秋田よ。

佐：秋田？

バ：奥さんの実家は秋田です。

中：そんなに帰れないですよ。

バ：そう。最初はすごい大変でした。お父さんが・・・お母さんは優しくかった。(フォデさんと)反対。いまは全然大丈夫です。今年は1回だけ帰った。1年に2回ぐらい秋田へ行きます。今年は1回しか行ってません。お母さんは全然変わらない。お父さんは前といまは全然違う。変わりました。

佐：理解してくれましたか？

バ：はい、理解してくれました。前は、日本は、お父さんもお母さんも全然アフリカのことを知らない。会ってから、理解するまでに時間がかかる。

佐：あなたは何か理解してもらうためにしましたか？

バ：いや、わたしは特に何もしてないです。がんばっただけ。子どももいます。はじめは1人だけでした。ここで、妻の家族はすぐに理解するのは難しかったです。だから、はじめて、お母さんはいいとして、

お父さんは、わたしがそこでライブをしたときに見に来てくれたんです。

佐：はあー。

バ：そうそう、来てくれたんです。お母さんは、わたしががんばっていることに気づいてくれたと思います。見たら、分かります。わたしもそれに気づきました。ああ、自分の息子ががんばっているな、と。わたしがもし挨拶したら・・・もし、誰かとあいさつするとき、相手の顔を見ますよね。どんな表情かを。お父さんの表情は厳しかった。でも、お母さんは勇気があります。わたしはその頃、日本語をあまり理解できませんでした。お父さんはわたしのことをよく知らないけれど、知ろうとしてくれました。わたしも彼のお父さんを見たのははじめてだったし。2回目は、妻の妹がいました。彼女も日本のことは分らなかったけど、妻が説明してくれました。アフリカのこと、わたしのこと。妹は同じ村に住んでいます。同じ家ではないけど。だから、その妹がわたしたちのことをお母さんに説明してくれたんです。少しずつ、自信を持てるようになりました。

佐：えー、すごい。

バ：だから、少しずつです。そのとき、2回目にそこに行ったとき、変化を見ました。自分も、向こうも。一緒にご飯を食べながら、少しずつ。

中：すごい田舎なんですよ。

バ：すごい田舎だよ！

中：家がもう、隣接してるわけじゃなくて、隣の家はすごい遠いような。秋田のなかでも田舎の方。だから、もっと。都会の人よりね。

佐：アフリカ人をはじめてみましたっていう・・・。

バ：そう。3回目とか4回目に行ったら、変わったから。仲がちょっとよくなった。

佐：それはよかった。いい話だね。

バ：最初は大変だけど。すぐは、家族は・・・(外国人の)誰と結婚しても日本人は言うと思う。コミュニケーションはできない。ことばのことね。アフリカ人のことを知らない。(佐々木を指しながら)あなたはアフリカに行ったことがあるでしょう。だから、わかるよね。家族は分からない。もし、奥さんはギニアに行ったことがあったから、わたしの家族のことを分かります。家族も奥さんのことをわかります。でも、わたしははじめてだったから。コミュニケーションはすぐにできないから、ゆっくり、ゆっくり。

佐：だから、奥さんがアフリカのことを話して、家族のことをラウラウとかに話して。

バ：そうすると自信が持てる。がんばれる。

佐：全く知らないと難しいよね。それはもう家族も仕事も最初は、やっぱり、とても大変だったんですね。

中：いつも大変だったね。

佐：勉強になりました。

フ：がんばらないと。

中：ここ日本とギニアとでは、がんばるって言っても同じじゃないですよ。でも、いつもがんばるってこと。

佐：今日の結論は・・・。

バ：がんばることが大事。自信、勇気が大事。

フ：日本人はいつも「がんばって」って言う。

バ：「がんばって」って、courageってことでしょ？

佐：Bon courage はがんばって。

フ：courage がないと。よし、がんばろう！

(一同、笑う)

中：フォデさん、日本人みたいだね。

フ：Courage がないと、がんばれない。Courage があれば、ここ日本にすることができる。でも、Courage がないと、国に帰るしかない。

佐：そういう人いっぱい見てきた。

フ：いっぱいある。

佐：ああ、もう無理だって。

フ：最初はむずかしい。アフリカの文化とここは違うから。少しずつ。もし Courage がなければ、帰るしかない。Courage があれば、少しずつ・・・。

バ：少しずつ・・・。

フ：そうすると、よくなる。うまくいかないとはばかり思っていると・・・疲れる。そして帰る。でもいつか、後悔する。

佐：ああ、後悔する。

フ：ああ、もう終わった、と。Courage がなかったと。最初はむずかしい。でも、がんばれば、よくなる。家族との関係もよくなる。少しずつ。人生もよくなる。でも、Courage がなかったり、がんばらなかつたりすると・・・奥さんのお父さんやお母さんがよくしてくれない、って。でもすぐには無理。同じ文化じゃないから。少しずつ、よくなる。

バ：がんばろうね。

中：ギニアの人は、ほんとうにあきらめないよね。いつもがんばろうとする。この忍耐力はすごいと思う。忍耐力。ぜったいあきらめないから。ある種の粘り強さというか、よく言えば。日本人にはないことだと思う。

フ：ギニアの人はほんとうにがんばる。

バ：どこの国に行っても、大変。

フ：大変だけど、がんばる。ここは難しいなと思っても、がんばろうとする。帰らない。

中：絶対帰らない。

バ：帰らないよ。

フ：神様は、自分を見てる。がんばってるところを見てる。そうすると、神様は助けてくれる。がんばればね。がんばれば助けてくれるけど、がんばらないと助けてくれない。がんばらないと帰るしかない。

バ：そうそうそう。よくないことがたくさんあっても、がんばれば、いいことがあるっていうことわざがある。悪いことがつづいていてもがんばれば、神様が見てくれている。そして、チャンスをくれる。次の。次、いいことが来る。みんな同じ。もし悪いことがあって・・・。

フ：ああ、もう嫌だってなったらね・・・さっき、あなたが言ってたように、ニジェール人が「日本はむずかしい、大変」って。いやいや、そうじゃない。

佐：みんな、帰りたがる。

バ：ああ、違う。世界中どこの国にもシステム（その国のやり方）がある。ドイツにはドイツの、フランスにはフランスの。人間は同じ。人間は人間。仕事は仕事。どこでもがんばれる。

フ：日本はよい国。セクバっていう、わたしたちの友達いるけど、7年、8年日本に住んでいるギニア人です。はじめて日本に来たとき、わたしに言いました「友よ、日本はいい国だから。でも、がんばれば、の話」。そう言われたことを忘れていません。がんばれば、ということ。がんばれば、稼ぐこともできる。がんばらないと、いつか後悔することになると彼は言った。もし大変なことがあっても、うまくいく。忍耐力。がんばれば。Courage、Patience。「もっとがんばれば、いいことがある」と言った。だからがんばる。

バ：帰りたいでしょ？

フ：そう、帰りたいたいから、3年がんばってる。

バ：でも来年は帰れないよ。

フ：たぶん、来年は帰れない。

バ：再来年は？がんばりすぎじゃない？

フ：わたしは5年はがんばるって決心した。アフリカに帰らないって。

バ：え？ほんとにそう決めたの？

フ：そう、アラーに誓ったよ。

バ：へえ、そう神に誓ったんですね。

佐：もう2年過ぎたってことですよ。

フ：5年間はアフリカに帰らないと決めた。

バ：約束？これ（音を）録ってるよ！

フ：いいよ。なんでかって、わたしはアフリカの家族のことを考えています。稼がないと。5年間。わたしはお母さんにそう言いました。お母さんもそれがいいと言いました。お母さんはわたしに期待しているので、がんばれます。もしお金を稼いだら、アフリカに送るし。それがやる気を生むわけです。

中：彼（フォデさん）はいつも、よく計算して、よく考えて、そして決めています。

フ：来年は帰ろうと思う。

バ：再来年は行かないって言ったじゃない！

フ：5年はギニアに帰らずにがんばるって決めた。もし問題があっても、日本にいれば、助けることができる。自分は仕事して、家では奥さんとごはん食べて、週末はでかけたりして、それで十分です。奥さんといて幸せです。日本にいて幸せです。すべてうまくいく。それが大事。日本だけじゃない。わたしたちはどこにしようと、がんばる。そうすることでアフリカの家族は助かる。がんばらないと、1年ごとに帰っていたら、お金が足りなくなる。チケット代はとても高い。20万以上する。60万円あったとしても、向こうに行けばすぐになくなってしまふ。少しずつ準備すれば、よく考えて。いつか歳を取って、体力はなくなってしまふ。だから若いうちにがんばらないといけない。将来のことを考えてね。

佐：それはすごいね。

中：めずらしいよ。

フ：将来、歳をとって、体力がなくなることを考えてる。いまは、がんばれる。いつか後悔はしたくないから。

バ：インシャラ。後悔しないように。

フ：だからやる気を持って。いい時もあれば、悪い時もある。

中：いい言葉をね。

フ：みんなね。お父さんは亡くなったけど、お父さんが言ったことはね、いつも記憶は頭の中にある。決して忘れない。成長していくっていうこと。それが大事です。

佐：ありがとうございました。

中：よく分かりました。

フ：今日はアフリカのこと、家族のことを話せてよかったです。こういうことを知ってもらうのは大事です。大変なことがあるわけです。今日はとてもうれしいです。

佐：もう閉めの言葉ですね

（一同、笑う）

フ：わたしとバフォデ・バンゲーラ。彼もうれしいはずですよ。

バ：今日はこういう風に話す場に招待してもらい、とてもうれしかったです。いま、日本ではまだまだがんばらないといけません。

フ：ここにいるのは仕事ですよ。日本でがんばっているアフリカの人がいるということ。何年いるのか、

どんな風ががんばっているのか。それを話すために来ました。あなたたちは研究をしているわけですよね。日本にはほかにもいます。セネガル人、ニジェール人、マリ人。今日はわたしたちに仕事の話を書くということでした。死ぬまで日本でがんばります。インシャラ。

バ：がんばりましょう！

フ：よし！1、2、3、4、よし！

佐：まとまった（笑）

一同：ありがとうございました。

■ 考察

上記で記したギニアからの移住者である2名の体験をもとに、語られなかったさまざまな事情を追記しながら、以下、日本社会のあり方について考察することとする。

「仕事」のとらえ方

ギニアの都市社会では、定職に就くことは簡単ではない。日本社会における「不況」による失業率の高さは次元が異なる、慢性化した経済的貧困状態がつづいている。一時的であっても現金収入を得られる仕事に就くことですら簡単なことではない。ただし、ギニア（特に都市部）において「仕事」は現金収入を伴う営みであるとは限らず、自分自身がライフワーク＝一生をかけてかかり、磨いていくことといった方が、なじみがよい。

1958年に独立後の国家建設を進めるなか、初代大統領セク・トゥーレ（Sékou Touré）は多様なエスニックグループを一つの「国民」として仕立て上げるため、音楽と踊りを利用した。政治的メッセージが込められた歌を広め、隔年開催の「国民芸術文化祭」への参加を通じて、人びとは「ギニア国民としての自覚を深めていった」（鈴木，2014）。そのなかで、各地には伝統音楽（楽器）をベースとしたグループが多数結成されていった。

本座談会の参加者であるバフォデ・バングーラ氏は、コナクリ市マタン地区（Conakry, Matam）の出身である。国立グループ「Ballet Djoliba」で打楽器奏者を務める父親の元に生まれ、幼少のころから、地元マタン地区の音楽グループの一員として活動してきた。彼にとっての「仕事」とは、太鼓を叩き、音楽を奏することである。練習活動そのものも「仕事」の一部として認識されおり、それは彼の語りの中からも見て取れる。「仕事」を通じての現金収入は主に乾季（12月～4月）の結婚式や行事における演奏に限られ、雨季やラマダンの最中には練習自体がストップする。しかし、彼には音楽という仕事＝ライフワークがあるため、自他ともに彼を「失業者」として認識することはない。むしろ、自分はミュージシャンであると名乗ることができる、「仕事がある」人間である。

彼にとって音楽は彼の生き方そのものであるため、日本でも音楽を「仕事」として位置づけられることを前提として来日した。しかし、日本の仕事観は彼らのものと大きく異なり、現金収入を得る仕事に就かなければ、生活が成り立たないということをはじめて経験することになった。これまで、バフォデ氏は建築現場や調理補助、引っ越し業などのアルバイトに就いてきた。ただし、彼には、音楽が「仕事」があり、自分はミュージシャンであるという自負もある。ギニアではアーティストを名乗るものが他の仕事を行うことは、「恥」になるという。これは、スモールビジネスを組み合わせて生活している人びと、特に女性たちとはまったく異なったマインドである。女性はダンサーやシンガーであっても、小規模なビジネスを兼業していることが少なくない。不安定ながらも収入源を複数もつことによって、リスクを分散させている。子どもを実際に育てる役割（食事を作り与えること）を担う女性たちは、ライフワークとしての仕事よりも、現金収入としての仕事を重んじる傾向にあるからだ。

現在、バフォデ氏は従来のこだわりを捨て、日本社会で生きていくために、音楽活動とその他のパートタ

イムの仕事を行うことにより、複数の収入源を持つということを選択している。こうした変化は、「郷に入っては郷にしたがえ」ということばで表現できるほど、簡単なことではない。プライドと現実のあいだに相当の譲歩があるにも関わらず、周りには不安定な就業形態として映るだろう。こうした「仕事」をめぐる個々の心情をとらえることは難しい。

フォデ氏は、ギニアで生活を送っていた時代は、打楽器の制作と修繕を主たる職業としていた。つまり、雇用されている立場にあった。よって、バフォデ氏にとって音楽という仕事がライフワークとして位置づけられていることと、フォデ氏にとっての仕事とは違いがある。日本社会で2年以上同じ会社での勤務が可能となっている由縁は、ここにあると考えられる。ギニアでの生活時も現金収入を得ることの重要性や、雇われて働くということの実情を理解していた。よって、フォデ氏にとって仕事とは現金収入を得ることであり、仕事＝ライフワークという発想は持ち合わせていない。むしろ、家族を養うために稼がなければならないという意識が非常に強い。特に故郷の家族からの彼に対する期待は大きく、同時に彼自身がそれに応えたいという気持ちを強く持っている。実際には時給制での勤務形態であるため、彼にとっての理想的な収入を得ることはむずかしいものの、第一に毎月収入があることに安定を見出している部分が語りにあらわれている。また、外国人の自分が日本社会に受け入れられ、馴染むためのステップとして、仕事を位置付けている節がある。座談会中、雇い主への感謝の発言がたびたび見られたことは、彼が仕事を社会との接点として見出し、現金収入を得ることと同様に重視していることのあらわれと言えよう。

家族観と生き方

1) で見たように、外国から移住してきた人びとによる「働くこと」に関する語りはおのずと、家族観や生き方への言及に及んだ。両氏は、日本の家族とギニアの家族双方を支えていかなければならない立場にある。相互扶助の精神が強いギニアの社会では、富める者が富めない者を養うことは一般的な習慣として根付いている。それはその家族（親族）の一員である限り、逃れることができない義務でもある。海外に出た者は、当然富める者として位置づけられるが、移住先での生活の実態は、ギニア国内に留まっている家族たちには十分理解されていない。それは「説明しても分からない」ことだと言う。ゆえに、故郷の家族との関係を断つか、要求に可能な範囲で答えつづけるということの二択が迫られる。前者を選択することは最終手段である。ゆえに、自己の生活よりも、故郷の家族を優先する傾向が強く、必然的に日本の家族がそのしわ寄せを食うということも少なくない。

インフラが未整備なギニア社会では、光熱費は毎月支払うものではない。また、電気や水道を個人で引いている者よりも、複数の世帯で共同のパイプや電線を使用している場合が多いため、個別請求ではなく、ある期間（2～3ヶ月のときもあれば、半年という場合もある）に全世帯が使用した分を均等割りすることが一般的である。よって、一世帯の支払いの滞りは他の世帯にも影響を与えるため、ここぞというときに現金が用意できないことは大きな問題となる。しかし、その「ここぞ」のタイミングが読めないことや、日々の生活費を優先しているため、貯蓄することが難しく、まさに「ここぞ」のタイミングで手持ちの現金に余裕が一切ないという事態が起こってしまう。また、家賃は数年分をまとめて支払うため、かなりまとまった金額が必要になる。家賃更新時は光熱費に比べると、予想がつくものの、金額が大きいいため、用意できない場合が少なくない。こうした際どうするかと言えば、手持ちがある者を頼る。こういうときにもっとも頼りにされるのが、海外移住組である。さらに、同居する家族は流動的で、成員は増えたり減ったりするのが常であるため、日本の現代的な家族観からは想像すらつきにくいところから、経済的援助の要請が届く。それは大きな負担であると同時に、かれらの生きる活力にもなっている。

両氏は夫婦あるいは夫婦とその子どもだけで暮らしているいわゆる核家族である。ギニアの都市部に暮らす男性の大半は通常、就寝時以外は自宅外で過ごす。同性の友人や仕事仲間との時間が、自宅で過ごす時間よりも圧倒的に長い。自宅は食事を取り寝る場所であり、くつろいだり、談笑したりする場所としては認識

されていない。自宅にいる時間が長い場合は、体調を崩しているなど、何らかの理由がある場合に限られているといってもよいだろう。

また、仕事や友人関係のトラブルを配偶者に報告することはまずない。こうした習慣は来日後もつづくのが通常で、ゆえに、日本の家族が知り得ないところでトラブルが大きくなってしまいうということもある。仕事で欠勤や遅刻などをした際の対処方法を例に挙げることができる。何らかの理由があっても言語上の問題によって、十分にそれを説明できない場合がある。日本の雇用側としては（嘘でもよいので）もっともらしい説明を受けることにより、その場をおさめる、ということをするが、そのもっともらしい説明ができず、かつ、それを配偶者に頼むということもないまましていると、場合によっては解雇されてしまう。配偶者は解雇されて、あるいは欠勤や遅刻について雇用主から直接問い合わせられることによって、はじめて事を知る。配偶者からすれば、大事なことを話さない態度に納得できるはずもなく、信頼関係にひびが入ってしまうということもしばしば起こり得る。こうした振舞いは、日本人が想像し定義する「家族を思いやる／重んじる」という行為からはかけ離れているように見える。しかし、彼が家族を思いやっていないわけでもなく、軽んじているわけでもないことは、上述した扶養感覚からも推察できるだろう。

そして、追記しておきたいことは、こうした類いの問題を解決する際に頼るのは、配偶者ではなく、身近な目上の人である。第三者的な立場に当たる目上の人を仲介者とすることが、諍いや問題の解決には不可欠なステップである。しかし、核家族で暮らしていると、問題解決を気軽に頼める目上の人がない。バフォデ氏はかつてマリ人の先輩ミュージシャンと一緒に働いていたことがあり、彼がいたからがんばれた、と語った。日常的な職場での不安解消ということに加え、こうした目上の人と同じ職場にいるということは、トラブル解決という点でも心強い。しかし、外国人労働者は職場で概して孤独である。特に中小規模、あるいは短期的な雇用の現場では、自分以外に外国人がいないということも少なくない。それは彼らにとつてのセーフティネットの不在でもある。

仕事上の問題が家族の問題に直結するという点は、日本的な文脈ゆえであるという点、さらに日本では家族関係の希薄化が指摘されるなか、このように家族の助けなしには生活が立ち行かなくなるという矛盾が生じていることが、彼らの語りから見てきた。

■ まとめ

本座談会では、日本とは社会的なシステムや仕事・家族に対する一般的な考え方が異なる「外国人移住者」の立場から、日本の社会をとらえなおすことを試みた。日本の社会的システムに対する彼らの考えや意見の背景には、彼らが故郷で培ってきた経験や習慣がある。ゆえに座談会は、まず移住前の生活の様子、次に日本に移住してからのできごとという風に時系列に沿って語るかたちで進行した。

同じ国の出身者であっても、バックグラウンドが異なることにより、仕事というものの定義・それに対する価値観には違いがみられた。彼らの仕事をめぐる語りには、ライフワークバランスや誇りを持った生き方、家族との関係性、社会との接点としての仕事の位置づけなど、現代の日本社会における働き方と生き方の問題に示唆的な部分が多数含まれている。

日本の現代社会では、さまざまなトラブルを自力で解決しなければならない傾向にある。あるいは、経済的な余力があれば、専門家に依頼するというように、問題解決がビジネス化している。しかし、外国人移住者（労働者）はこの両者が手が届かない存在であり、日本社会的なセーフティネットの外に位置づけられてしまいがちである。

本座談会の基本的な概念であるトランスディシプリナリティ（Transdisciplinarity）とは、社会と科学を超えた協働のあり方を意味するものである。その協働のあり方の一つとして、座談会が位置づけられる。今回は、日本の社会の成り立ちを担う存在として、外国人移住者（労働者）2人に参加してもらい、彼らの目線で働くということについて語ってもらった。彼らにはこうした所見を口に出し、日本人に向けて語る場がこ

れまでなかったという。「こうした場を作ってくれたことに感謝する」ということには、こうした場がなかったことへの多少の不満も含まれているのかも知れない。座談会は協働に向けたステップの一つ、あるいは、協働という営みの一片に当たる。他者が抱える問題をいかに「わたしたち」の問題としてとらえることができるのか。まずは知ること、それが社会的な問題を解決していくための第一歩となると、本座談会を通して、あらためて確信した。

■ 謝辞

本座談会は、2014年機構長裁量経費・研究部事業、TD活動提案「TDをお題とする座談会」（田中プロ・石川プロ）の企画のひとつとして実施されたものです。この企画に参加していただいたバフォデ・バンゲラさん、フォデ・ラミン・スマさん、佐々木夕子研究員に心からの謝意を表します。

